生きてるんだ

tonebon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生きてるんだ

【Nコード】

N7247Z

【作者名】

tonebon

【あらすじ】

荒唐無稽なSSです。テーマは「籠」でした。グロ描写あるので注意。

生きてるんだ

「背骨は生きているんだ」

俺は弟子にそう一喝した。

整体で飯を食ってきてはや30年。一応、ベテランを自負していたが――

「でも、どうしてもお客に文句言われるんですよ」

弟子一人満足に育てられていない状況では自慢できやしない。

まったくこいつはいつまでたっても芽が出ない。

俺の名前は滝。たきのぼる。

そして、こいつが、三津地。みずちって読むのだが、名前だけは立派だ。

まったく、なんだその頼りない目は。俺の「技」をこいつに伝えなかりやならないなんて悲しくなってくる。

「先生、僕、どうすればいいんでしょう……」

まあ、やる気だけは認める。いまだに破門にしてないのはやる気だけは一人前だからなのだ。

「しょうがねえ、身をもって教えてやる。寝な」

一昔前のブームのころにや、ちよつとはＴＶで名前の知れた俺だ。
「背骨の声を聞ける男」と言われた技を見せてやる。

「ほ、ほんとですか!？」

三津地は喜んでベッドにうつぶせた。うきうきと。

「なに喜んでるんだよ」

「だって先生に診てもらうのはじめてですから」

そつだつけ？ まあ、いい。

背中をまずさすり、背骨の位置をたどる。

両手の親指を背骨の脇にそってこねて行く。

背骨の状態から、こいつの体の全てが伝わってくる。

背骨が語ってくる。年月が俺にさずけた技だ。

「ほれ、背骨が語り出したぞ」

「きもちいいですよ先生、さすがです」

「そんな事言ってる場合か、語ってるのは不満だらけだぞ」

曲がっている、かたよっている、ととのっていない。
背骨が不満をベラベラ語り出す。ベラベラ百連発だ。
その不満の一言がはつきりと聞こえた。

「わたしは、もつたえられません」

「ああ、こんな奴の背骨やってないで飛んで逃げちまえよ」

その時、ぱっくりと背中が左右に開いた。

バリバリと肋骨の戒めをふりほどいて空中に踊り出た背骨は首から上もくっ

つけたまま、

「まったく、おっしゃられるとおりです。さすが先生」

と、首から上で「礼」をし、窓から夕日色の空へ飛んでいってしまった。

「……背骨って生きてるんだ」

俺は背中にむずかゆさを感じながら、龍のように空をゆく彼を眺めた。

(後書き)

超昔書いたSSです。

リハビリと精神修行で晒します。

うひゃー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7247z/>

生きてるんだ

2011年12月24日01時46分発行